



日文的Webサイト

日文 🔍





はじめに

楽しく「美術」の学習指導を営むために

あなたは今、自信をもって美術科教師の仕事ができていますか。あなたの目の前の生徒たちは美術科の時間をワクワクしながら有意義に過ごせているでしょうか。

本書のねらいは、中学校美術科を担当される先生方が、ご自身の仕事の一丁目一番地である学習指導と学習評価を安心して楽しく営むことができるようにすることです。そして、その影響のもとで、中学生たちが目を輝かせて美術科の授業に臨み、その学びに必要な感や意味を見出せるようにすることを目指しています。

美術科の学習指導を楽しく営む、といっても、それにはいろいろな捉え方があると思います。例えば、大学を卒業して先生になったばかりの方の中には、「生徒の自由を認め、生徒がやりたいと思うことをたくさん取り入れて美術を好きになってもらいたい」と考えている方がいるかもしれません。また、作家活動をしながら非常勤講師をされている先生の中には、「ご自身の活動から得られるインスピレーションやスキルを生徒にプレゼントすること」にやりがいを感じている方もいるかもしれません。それらは、とても素敵なことだと

思います。

しかし、本当に子どもたちのことを考えるのならば、授業を営むご自身が、社会、そして学校の中でどのような役割を担っているのかを理解した上で、中学校で学ぶ教科としての美術の本質を捉え、安心して、楽しく学習指導を営んでいくことが大切だと思います。

そのためには、目の前の子どもたちの学習と、ご自身の学習指導・学習評価を取り巻く様々な仕組みを確かめておく必要があります。ちょっと立ち止まって学校教育活動全体へとまなざしを広げた上で、改めて美術科の学習指導・学習評価を見つめ直してみましよう。

学校組織の一員としての美術科の先生には、今、どのようなことが求められているのか、美術科の学習指導をどのように営むことが子どもたちにとって、ご自身にとっての安心と楽しさに結び付くのか…。本書を好きなところから読み進め、美術科教師という仕事に携わる時に役に立つ視点や考え方を共有していただくとともに、ご自身の実践に反映させていただければと思います。

中美チュービ

中学校美術の先生応援サイト

指導の悩みABC

先輩からのアドバイス
指導や授業での悩みや疑問を取り上げ、
問題解決へのアドバイスを提案しています。

定期更新中

WEB掲載 LINE UP

- Vol.01 図画工作から美術へ
- Vol.02 感性って何だろう
- Vol.03 授業のねらいが大切なのはなぜ?
- Vol.04 鑑賞の能力はどう身に付けさせるの?
- Vol.05 授業の前に決めておくことは?
- Vol.06 ほめるって難しい
- Vol.07 導入では何を注意するの?
- Vol.08 一人一人の生徒に対して、指導の手立てをどう考えたらいい?
- Vol.09 題材はどうやって選ぶの?
- Vol.10 アイデアスケッチに描くものは?
- Vol.11 言葉かけの役割は?
- Vol.12 「生徒はよく先生を見ている」思考力や表現力を育てるために
- Vol.13 上から目線と3つのスタンス
- Vol.14 井澤先生の夏休みへスキルアップ〜
- Vol.15 待つという指導の意味
- Vol.16 描くことで生み出される心の声〜夏休み明けの中3〜
- Vol.17 田村君の美術館デート
- Vol.18 デザイン(視覚伝達)パッケージデザイン
- Vol.19 新1年生の最初の授業はどうすればいいの?
- Vol.20 「知識・技能」より共通事項の捉え方
- Vol.21 1年生の年間指導計画はどう立てるの?
- Vol.22 キャリア教育に関わる授業
- Vol.23 研究会、全国大会に参加して
- Vol.24 同僚っていいもんだ!
- Vol.25 「学びに向かう力、人間性等」ってどうすることなの? ~「主体的に学習に取り組む態度」の評価として~
- Vol.26 創造の空間、美術室
- Vol.27 社会で生きている美術の学び
- Vol.28 「造形的な視点」とはどういうこと?
- Vol.29 発想に寄り添う
- Vol.30 ライバルから学ぶ
- Vol.31 研究会に参加して 前編
- Vol.32 研究会に参加して 後編
- Vol.33 研究会での成果を生かす (1年生への指導編)
- Vol.34 研究会での成果を生かす (2年生への指導編)
- Vol.35 研究会での成果を生かす (3年生への指導編)

冊子版
「指導の悩みABC」
併せてご覧ください!



ここから全話をご覧いただけます。

※ = 冊子版「指導の悩み ABC No.1」に掲載 = 冊子版「指導の悩み ABC No.2」に掲載



もくじ

■学校教育における指導と評価

- 1. 誰のための学校教育か？ …… 4
- 2. どんな子どもを育てるの？ …… 5
- 3. これからのカリキュラムマネジメントって？ …… 6
- 4. 美術科の学習指導と学習評価の改善に向けて …… 8
 - 教科目標と内容の構成 …… 12

■美術科における指導と評価

- 5. 美術科でどんな子どもを育てるの？ …… 14
- 6. 美術科って何を学ぶの？ …… 16
- 7. 美術科ではどんな授業が求められているの？ …… 18
- 8-1. 「知識・技能」は何を評価するの？ …… 20
- 8-2. 「思考・判断・表現」は何をみるの？ …… 22
- 8-3. 「主体的に学習に取り組む態度」って？ …… 24
- 9. 指導計画と評価ってどうするの？ …… 26
- 10. 一人ひとりのよさを見取る評価方法は？ …… 28
 - ワークシートで学びを拡げよう …… 32

執筆者

- 松原 雅俊 横浜国立大学 教授 (P.04~11)
- 川合 克彦 元 川崎市立玉川中学校 校長 (P.14~19)
- 岩崎 知美 川崎市立東橋中学校 教頭 (P.20~25)
- 長澤 博昭 元 横浜市立芹が谷中学校 校長 (P.26~33)



学校教育における指導と評価

1. なんのための学校教育か？

■「積みすぎた方舟」状態の中学校

あなたが今、働いている学校組織は、どんな組織ですか。校長先生をはじめとする学校のリーダー、あなたの周りの同僚の先生たちはどんな働き方をしているでしょうか。心身ともに急成長する多感な思春期の子どもたちを支える中学校という職場は、やることがたくさんあって、とても忙しいと思います。

社会の縮図となって表れるいじめや不登校の予防と対応、日本語指導が必要な生徒・発達障害・LGBTQなど多様性を踏まえた支援など、複雑化する教育課題に対応しつつ、部活動指導にも多くの時間を割き、登下校指導や地域行事への参画もこなすなど、昭和、平成、令和の時代を跨いで山積した業務によって「積みすぎた方舟」状態に陥ってしまっている中学校は、今、その業務を棚卸しして積み荷の点検と精選を行わなければならない大きな転換期を迎えています。

「積みすぎた方舟」が、乗組員である先生方の安心・安全を確保し、そのパフォーマンスの向上を図っていくために、平成31年に中央教育審議会において確認された教員が担うべき本来業務は次の3つです。

■優先すべきは「教育課程に基づく学習指導」

図1は、①～③の構造を示しています。

私たちが優先順位を高くして取り組まなければならない一丁目一番地の仕事が①の教育課程に基づく学習指導であることに疑いを挟む人はいないでしょう。教師の社会的ミッションは、子どもたちのために、学習指導を中心として教育活動の質を高めていくことに他なりません。

この学習指導を時代や社会の要請に適ったものにしていくために10年に1回リニューアルされる学習指導要領があります。各校の校長先生は、学習指導の基準である学習指導要領の実現を目指して組織全体を動かし、①～③の業務を次のように推進していきます。

① 教育活動の基準となる「学習指導要領」に基づいて、教



図1 学校が担う業務の構造

- ① 学習指導要領等を基準として編成された**教育課程に基づく学習指導**
- ② 児童生徒の人格の形成を助けるために必要不可欠な**生徒指導・進路指導**
- ③ 教育課程の実施や生徒指導の実施に必要な**学級経営や学校運営業務**

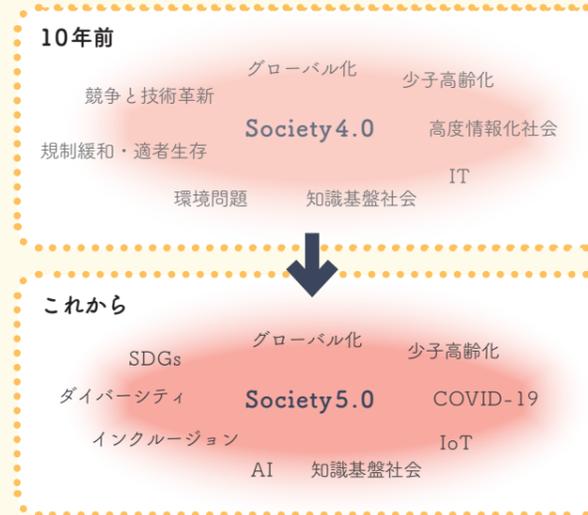
育活動の全体計画である教育課程をアップデートする。

② 学級経営を基盤とする生徒指導を充実させて生徒と生徒、生徒と先生の良好な人間関係をつくり出し、協働的な学びのベースを築くとともに、生徒のキャリア形成を促し、効果的な進路指導を進める。

③ 学校運営全体を通して安全で豊かな学びの風土をつくり出し、①②の実効性を確かめながら、不断の学校改善を進める。

このように、「教育課程」を学校の中心に据え、これに基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を目指していくことをカリキュラム・マネジメントといいます。

2. どんな子どもを育てるの？



【教科等を横断して育成を目指す力】



図2 社会の変化

■加速度的な社会の変化を想定して

今、各校の教育課程は、戦後9回目のリニューアルが施された平成29年3月告示の学習指導要領に基づいてアップデートが図られています。この学習指導要領は、グローバル化の中で競争と規制緩和を進めてきた新自由主義の経済政策の影響に加え、携帯端末やパーソナルコンピュータが一般化した知識基盤社会を主体的に生きていくのに必要となる「生きる力」を育てるという理念で改訂された平成10年、20年版の学習指導要領の流れを引き継いでいます。さらに今回は、AI技術の進展、国際情勢の変化や気候変動などがもたらす新たな生活環境など、先行き不透明な時代を想定して中身がリニューアルされました。(図2)

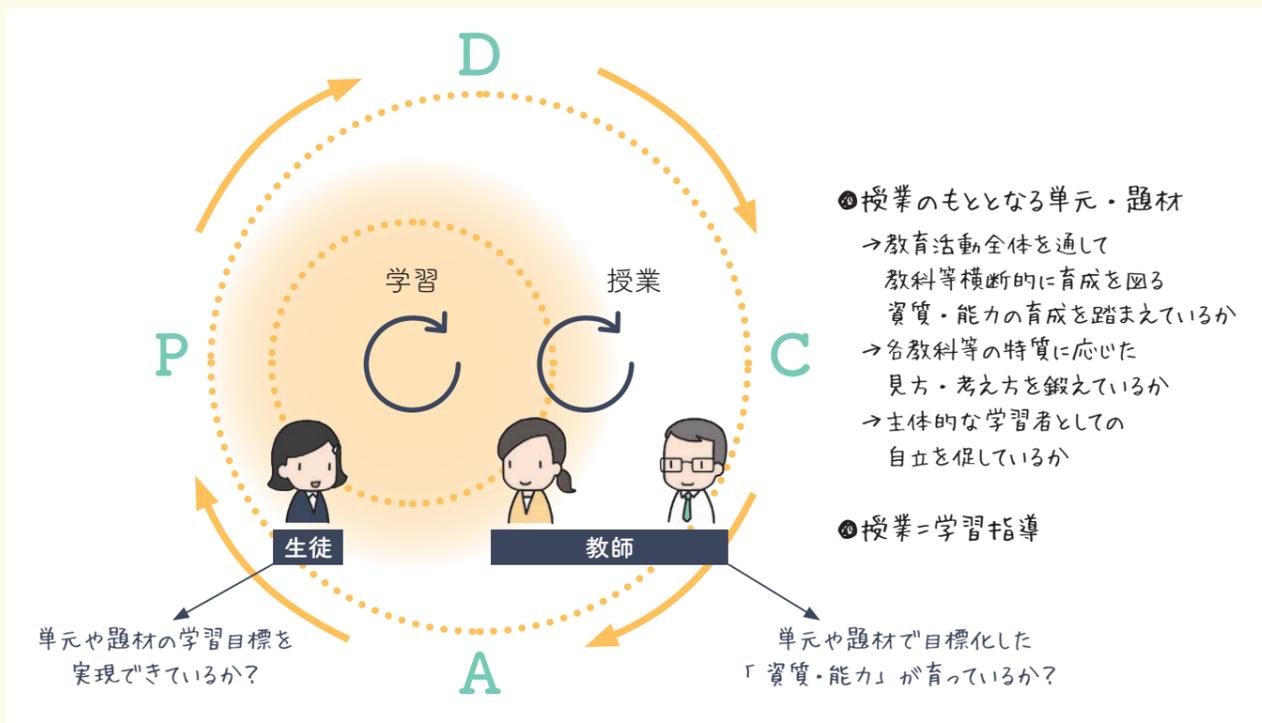
今回の学習指導要領では、変化の中で次々に訪れる未知なる状況に、柔軟にたくましく対応しながら、一人ひとりが幸福を追求できるようにするために学校全体でどのような資質・能力を育てるかを議論して定め、それらを各教科等の学びを横断して育てていくことが重視されています。教科等を横断して育成を目指す力という、従来重視されている「言語能力」、「情報活用能力」、「問題発見・解決能力」といった学習の基盤的能力が浮かびますが、加速度的な社会の変化を想定すると、他にもいろいろ考えられます。ここでは、学

習の基盤的能力の重要性和図2のような変化を踏まえ、以下に、3つ例示してみます。

- 今まで人間が行っていた仕事をAIやロボットが代行したり支援したりする技術が飛躍的に進展するSociety5.0において人間としての強みを生かす**柔軟な思考力**
- 気候変動や環境劣化、戦争による人権侵害、貧困や不平等など、国際的な諸課題の解決を目指すSDGsの実現に向け、**共に考え、実践する力**
- Withコロナ、Postコロナ時代への適応を図り、変化を受け入れながら試行錯誤を繰り返して**新たな価値を生み出す力**

学習指導要領総則編では、生徒たちを未来の担い手として活躍できるように育成するため、例示のような教科等を横断して育てる力を生徒、教職員、保護者や地域社会の皆さんで共有するとともに、力を合わせてカリキュラム・マネジメントを推進する「社会に開かれた教育課程」というアイデアが大テーマとなっています。

3. これからのカリキュラム・マネジメントって？



■これからのカリキュラム・マネジメント

これからのカリキュラム・マネジメントは、自校の生徒に教育活動全体を通してどのような資質・能力を育むかを明確に位置付けた教育課程の「編成・実施・評価・改善=PDCA」を、保護者や地域の皆さんも巻き込んで動態化していく総合的な営みであるといえるでしょう。つまり、教育実践の担い手である先生、学校の責任者である管理職の先生、学校で働くスタッフの皆さん、保護者・地域の皆さん、関係機関の皆さんによる教育活動への様々な関わりが、カリキュラム・マネジメントのつながりの中にあり、そのつながりが教育課程を有効に機能させていくのだと考えることができます。(図3)

この時、私たちは、①教育課程に位置付く教科等の学習指導、②学級経営や生徒指導、③学校運営としての校務分掌への取り組みなどが本当に生徒の資質・能力の育成に結び付いているかどうかを確かめながら、学校の教育活動を改善し続ける必要があります。そして、これを確かめる上で必要不可欠なのが、教育活動に対する評価という営みです。

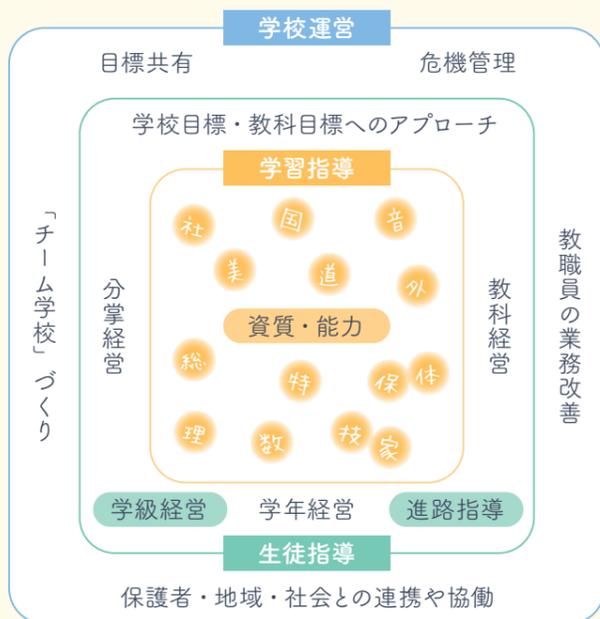


図3 教育課程を取り巻くつながり

■学習評価の重要性

図4は、教育活動の改善のために取り組まれているいろいろな評価活動の関係を表したものです。図1(P.4)・図3との重なりも踏まえてご覧ください。教育活動を総合的に改善していく様々な評価活動の中核に位置するのは、生徒の資質・能力の高まりを確かめる学習評価という営みに他なりません。

私たちは、主たる業務である教科等の授業、授業のまとまりである単元や題材の目標を生徒たちが実現できているかを確かめ、もし不十分であるなら、授業の方法、単元や題材の内容を改めなければなりません。

また同時に「柔軟な思考力」や「共に考え、実践する力」「新たな価値を生み出す力」といった、教科等を横断して目指す「資質・能力」の育成に貢献できているかという視点からも、単元や題材の計画と実践を振り返り、問題があれば授業、単元・題材、カリキュラムを改善する必要があります。

学習評価というと、一般的には、学習活動の成果をテストなどで測って「成績を付けること」と捉えられがちですが、それは様々な学習評価活動の中のほんの一部にすぎません。

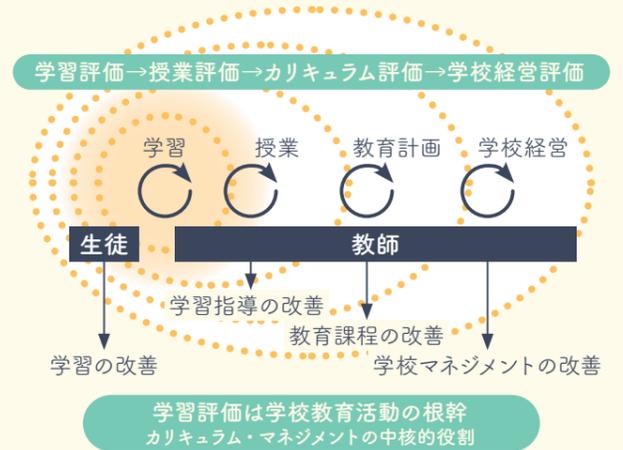


図4 学習評価を核とする学校経営

学習評価とは、学習活動のプロセスや結果から得られる様々な情報を基に、生徒が自身の学習活動を、教師が実施した学習指導をそれぞれ振り返り改善していくために欠くことのできない大切な教育活動なのです。学習評価を活用して授業やカリキュラムの改善に取り組むことは、学校の教育課程全体の改善に連動することであり、カリキュラム・マネジメントにおけるPDCAサイクルの軸となる大切な業務です。

■どのようなカリキュラム改善が必要なのか

例えば、あなたの学校が、「SDGsについて共に考え、実践する力」を、教育課程全体を通して教科等を横断して育てる〈共通目標〉と決めたとします。この状況を美術科の先生としてどのように捉えたらいいでしょう。考えていただきたいことは、大きく分けて次の二つです。

- ① 生徒が「造形的な見方・考え方」をふんだんに働かせながら、美術や美術文化との関係を広げたり、深めたりしていけるような題材の構成と配列を工夫し、実践・評価・改善すること
- ② ①の題材の構成と配列を工夫する際、〈共通目標〉を踏まえ、例えば、生徒がSDGsについて考えたり、行動したりできるような目標設定や場面設定を工夫し、実践・評価・改善すること

①は、学習指導要領美術編に示された教科目標の実現を、②は、学習指導要領総則編に基づく学校の〈共通目標〉の実現を目指すカリキュラム・マネジメントを表しています。私たちは、①、②のつながりや重なりを考え、それらを効果的に実現できるような題材の構成・配列を工夫して年間指導計



図5 教科目標と学校共通目標の重なり

画をつくり、これを実践・評価・改善していく必要があります。(図5)

勿論、①の題材の全てにSDGsへのアプローチを入れなければならない、といった形式的なことではありません。そうではなくて、例えば、題材やカリキュラムを考える時に学校としての〈共通目標〉を考慮した目標、内容・方法をいくつかの題材に組み込んでみたり、〈共通目標〉を基に他教科等とのコラボレーションを意図した題材配列を試みたり、といった実質的な工夫を年間指導計画に反映させることで、教科としての美術を、学校のカリキュラム・マネジメントと連動させ、生徒にとって学びがいのある学習の山場をつくっていきましょう……ということです。

さて、あなたの美術科の年間指導計画は、こうしたアイデアに合ったものになっているでしょうか。

4. 美術科の学習指導と学習評価の改善に向けて



図6 学習評価の三つの類型

■学習評価の三つの側面

まず、学習評価の類型について触れておきます。学習評価には、①学習指導をする前に生徒の実態を把握するための**診断的評価**、②生徒の力量形成を促すために学習のプロセスを評価・改善するための**形成的評価**、③生徒が目標をどの程度実現できたかをまとめて示す**総括的評価**の三つの類型があります。

美術科の学習指導に即してみています。

①診断的評価

例えば、新入生が入学してきた時、転動して新しい学校で仕事を始める時、そこには初めて出会う生徒がいます。そんな時、題材やカリキュラムの計画と実践に活用するために、その生徒たちがこれまでどのような題材を経験し、どのような学びを蓄積してきているか、学習集団としてどんな特徴もっているかなどを知るために生徒に質問したり、アンケートをとったりするのが**診断的評価**です。

また、日々の授業において「今日、Aさんは元気がないな、何かあったのかな。」と察する教師の心遣いなども授業の入り口で行う**診断的評価**の一つといえるかもしれません。

②形成的評価

私たちは、例えば、題材のワークシートやアイデアスケッチにコメントを書いて返したり、机間指導をしながら、よいところ・工夫しているところを褒めたり、質問して考えを引き出したり、生徒の困り感について相談にのったりといったコミュニケーションを重ねていますね。こうした対話的・伴走的な関わりには、生徒が自分のよいところを伸ばしたり、課題を自覚して改善できるように促したりする学習評価としての要素がたくさん含まれています。

言葉などを用いて学習評価情報を伝えることをフィードバックといいます。私たちは、題材目標や、授業での本時目標と照らしながら、いろいろなフィードバックを行い、生徒

とともに題材目標を追究したり、学習活動をよりよく練り上げるために授業の進め方を調整したりしています。

つまり、教師の学習指導・生徒の学習活動のプロセスに生じる学習評価情報は、学び手である生徒を励ましたり課題を共有したりするためだけでなく、学習指導を行っている教師自身に向けたフィードバックでもあるといえます。教師は、それらを活用して自らの授業・題材・カリキュラムが、生徒にとって学びがいのある魅力的なものになっているか、教科独自の見方や考え方を鍛えることができているかを確かめながら、生徒の学習活動の改善を促し、一方では、自らの学習指導の評価・改善も行っているわけです。

こうした評価活動を**形成的評価**といいます。文字通り、生徒と教師の力量形成を図っていく教育的な営みであり、学習評価の大切な機能がここにあるといえます。

■指導(学習)目標の三つの柱

平成29年改訂学習指導要領では、これまでの観点別学習状況評価の観点が4つから3つに改められました。それは、先に述べたように、学校教育活動の目的は生徒の資質・能力の育成にこそあるのだという、学校のあたりまえに立ち返り、自校の生徒に学校としてどのような力を育むかという考えに基づいて教育活動全体の目標を設定する時、これを分掌する各教科等の学習指導においても、同様に、どのような力を育むかを明確にすることが必要になったからです。

図7は、各教科等の学習指導において、それぞれの特質に応じて育成を目指す資質・能力、すなわち教科目標を考える際に共通のフレームとなっている三つの柱です。

美術科の学習指導と学習評価を行う際には、三つの柱に基づいて設定された教科目標に対応する学習評価の観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を、美術科としてどのように捉え、どのように育てていくかを知っておく必要があります。図8は、国立教育政策研究所の参考資料を基に美術科の目標と学習評価の3観点の関係を示したものです。

私たちは、学習指導要領美術編に示された目標・内容・内容の取扱いというルールを踏まえ、教科書を活用しながら、各学校の〈共通目標〉をはじめとする学校の特色を考慮して題材配列を工夫したり、生徒の実態に合わせて題材をカスタマイズしたりして年間指導計画を策定し、これに従って授業

◎総括的評価

私たちは、学期の節目や年度末に、観点別学習状況評価とこれらを総括した評定を、いわゆる成績として生徒と保護者に伝えています。これは3つの類型の中の総括的評価という方法を活用して行っています。

観点ごとのABCや5～1の評定は、表現題材の作品の出来栄や、期末テストの点数だけで判断したものではないはずです。予めポイントを絞った題材の評価計画を立て、題材目標の実現に向けて**形成的評価**を行いながら進める学習指導のプロセスで、ワークシートへの生徒の記述やアイデアスケッチ、表現活動の途中の状況などから必要な情報を記録に残しておくことで、それらが**総括的評価**の根拠としての働きもすることになります。

を展開しています。

この時、大切なのが、先に述べた通り、実施している授業の1時間1時間が生徒にとって学びがいのある魅力的なものになっているか、教科の特質である造形的な見方・考え方をふんだんに働かせて表現や鑑賞の活動に取り組むことができているか、ということを確認しながら授業を改善し続けることです。そして、そのために必要なのが、**形成的評価**を活用し、「指導と評価の一体化」を図っていくということです。

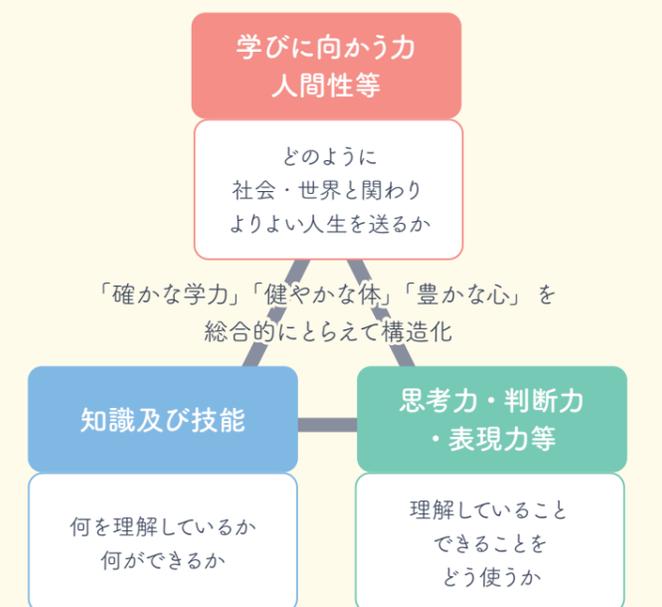
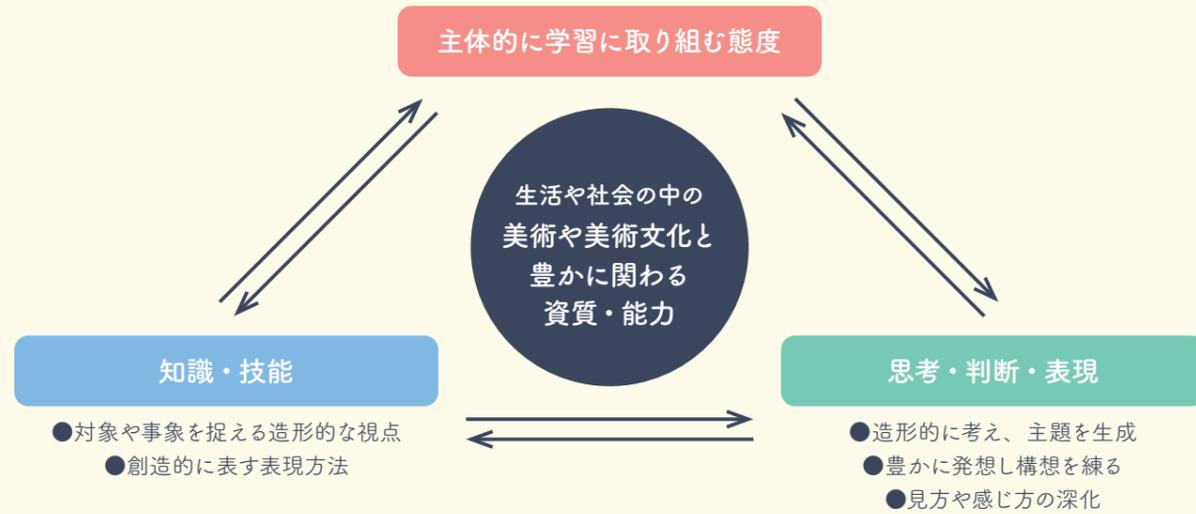


図7 育成すべき資質能力の三つの柱

- 創造の喜び ●愛好する心情 ●豊かな感性
- 心豊かな生活 ●豊かな情操

図8 教科目標と3観点との関係



■形成的評価を生かした指導と評価の一体化

学期末に生徒と保護者に渡す通知表には、学期全体を通して教科ごとの目標がどの程度実現できていたかを示すABCの観点別評価と、それらを総括して数値化した5段階の評定を載せています。

同じ題材を経験した生徒、X中学校の生徒AさんとY中学校のBさんが、1学期の通知表を手にして次のようにつぶやいています。あなたはこれをどのように捉えますか。

◆Aさんのつぶやき

『今学期の美術では「見つめると見えてくるもの」という絵に表す題材と、「広がる模様の世界」という題材に取り組んだ。どちらも先生と確認した目標が十分追究できたし、楽しかった。特に「広がる模様の世界」では、授業の初めの方で鑑賞を行い、自然から発想を得たいろいろな模様があることを知り、それらを基にアイデアを練ったり、友だちのアイデアを参考にさせてもらったりして、模様というものに対する見方が広がった。おかげでたくさんのアイデアを浮かべることができた。観点別評価はBAAで評定は「4」だった。次はAAAを目指したい』

◆Bさんのつぶやき

『観点別評価はBBCで評定は「3」だった。今学期の美術では身近なものの絵を描いたり、模様のデザインをしたりしたけど、どうもうまくいかなかったな。大体、先生が授業で何を求めているのかよく分からない。結局、はじめからうまく描ける人がいつも高く評価されるんだ。何を頑

張ったらいかが分からないのにCをつけられて、美術なんかなければいいのに……』

Aさんのように自己の学習の振り返りができている生徒は、評定の意味をしっかりと受け止めることができると思います。一方、Bさんのように振り返りの材料を自覚できない場合、その結果に不満をつのらせ、不信感を抱いています。これは、Bさんに原因があるのでしょうか。Bさんのような状況を招くと、面談や通知表への記述で補うことはできません。こうした切ない状況を導く前にY中学校の美術の先生は、どうすればよかったですか。

学習指導要領における教科目標、学年の目標を踏まえ、学習指導を行う私たちが目指すことは、対象となる生徒全員の観点別学習状況評価において「B」の状況を実現していくことです。Y中の美術の先生が、BさんのBBCを、BBBの状況に高めていくには、どのような手立てが必要なのでしょう。

図9は、教科目標、題材目標、1時間1時間の授業での目標を、生徒が自分のこととして捉えて前向きに取り組めるように、目標を問いの形にして構造化を試みたカリキュラムの概念図です。X中とY中が実施した題材をモデルに作成し、題材を展開する過程で、何から評価情報を得るか、ということも併せて下段に示しています。

Y中学校の先生は、実施したそれぞれの題材を、教科目標、題材目標、各授業の本時目標を構造化して捉え直すことができると思います。その上で、1時間1時間の授業

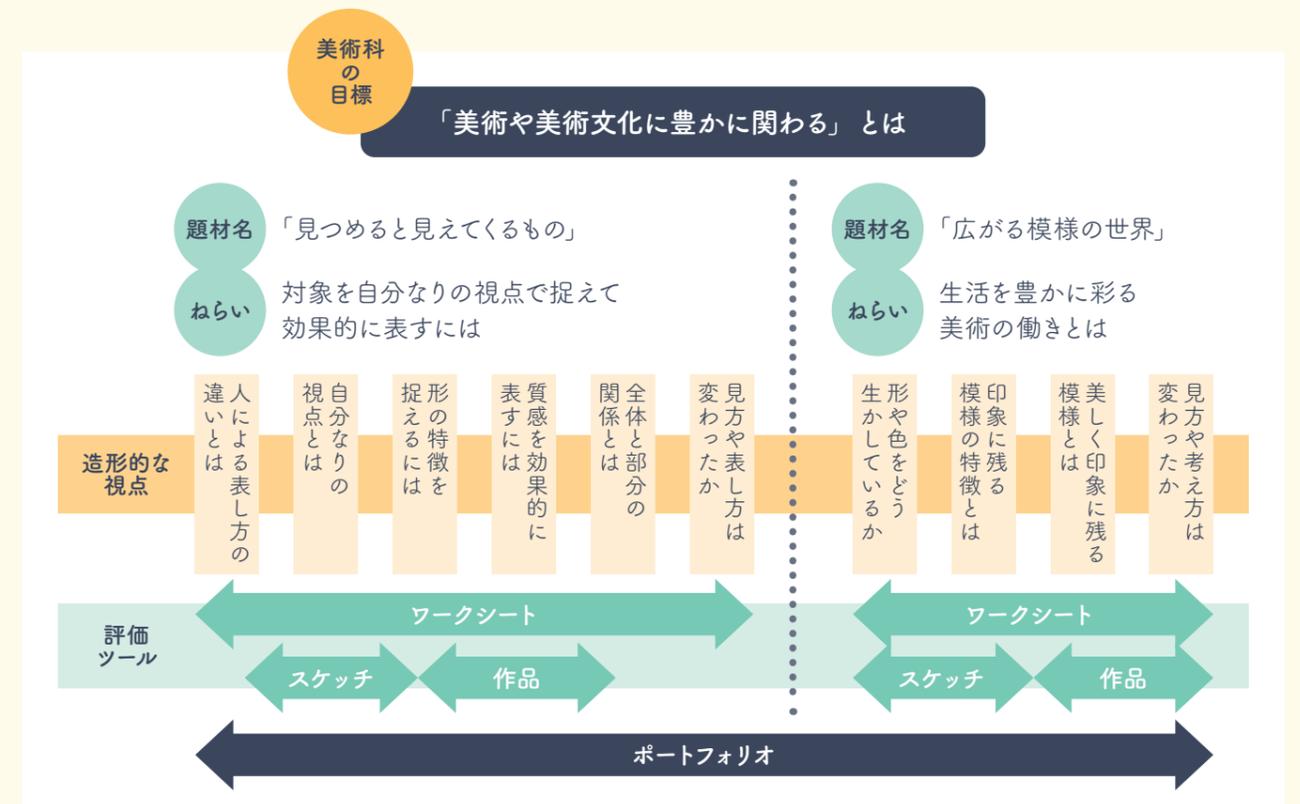


図9 題材における目標構造と評価の材料

の目標を生徒たちと共有しながら授業を進め、目標と照らしたフィードバックを行い、その一部を記録として残し、総括的評価に反映させることができていたら、BさんのBBCという状況は回避できたかもしれません。よしんば、結果としてBBCであったとしても、Bさんに不満や不信感を抱かせることはなかったのではないのでしょうか。

今、私たちに、題材の展開に臨んで、題材ごと、授業ごとの目標へのアプローチを支えるために、題材全体の中のイマ・ココの意味を生徒たちが捉えられるようにすることが求められています。その上で、彼ら・彼女らが自ら問いを立て、その解決への試行錯誤(思考・判断・表現)のプロセスにおいて知識や技能を活用・獲得・更新できているかどうか、さらには、自身の学びの価値を自覚できているかどうかを確かめ、生徒へのフィードバックを通して学習改善を促し、自身の授業改善を不断に目指していくことが必要になります。こうした営みこそが、「形成的評価を活用した指導と評価の一体化」

ということであり、今、求められている授業づくりの肝であるといえるでしょう。

このようにして美術科の学習を、豊かさと確かさの両面から支え、学習者である生徒たちを美術や美術文化に開き、自身にとっての美術とは何かを言語化できるようにしていくことが、美術科教師の冥利というものではないのでしょうか。どうでしょう。美術科の先生が今、どのような仕組みの中で、どのような役割に位置付く仕事をしているのか、中学校で学ぶ教科としての美術における指導と評価とは、どのようなことなのか再確認いただくことはできたでしょうか。本稿で述べてきた通り、学校教育活動全体と「美術」の関係を踏まえ、学習指導と学習評価を一体的に捉える眼差しを大切にしながら、美術科教師としてのカリキュラムマネジメントを進めることで、生徒とともに、安心して、楽しく美術科の授業を営んでいくことを願っています。

■参考文献

- 中央教育審議会「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)」平成31年1月25日
- 国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 美術」令和2年3月 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyokka/r020326_mid_bijyut.pdf

教科の目標	
表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	
(1) 「知識及び技能」に関する目標 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする	
(2) 「思考力、判断力、表現力等」に関する目標 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。	
(3) 「学びに向かう人間性等」に関する目標 美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。	

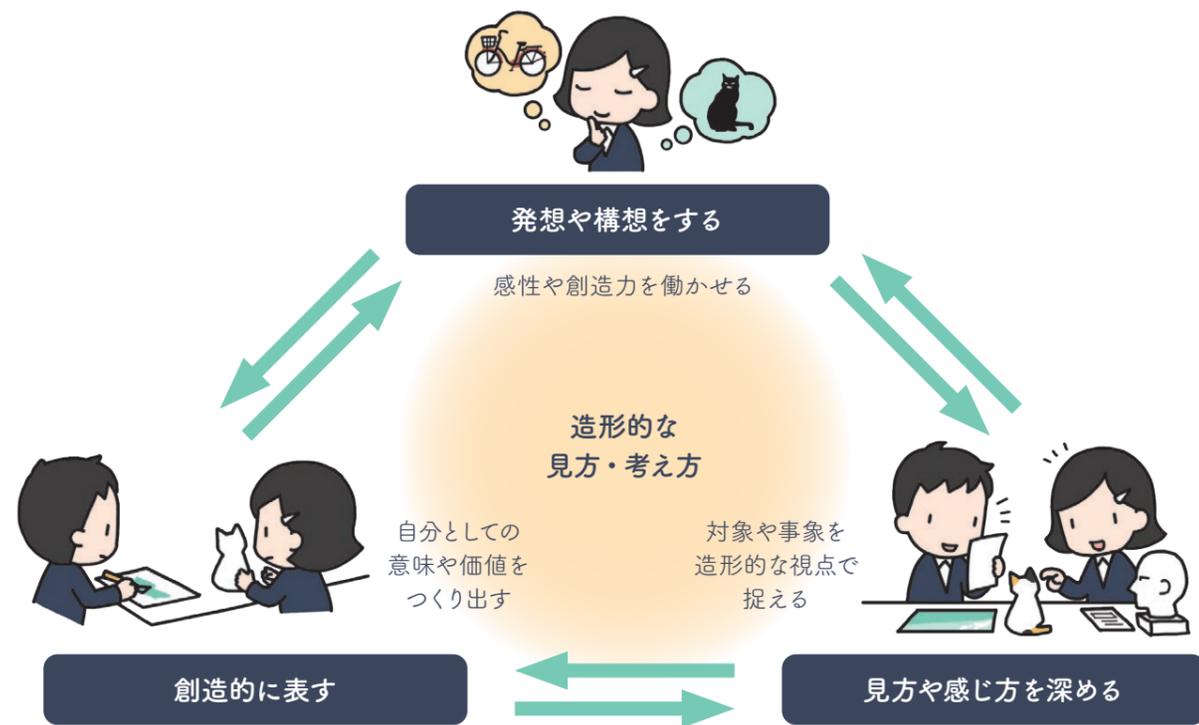
内容の構成				目標との関連		
領域等	項目	事項				
		指導内容	指導事項			
領域	A 表現	(1) 発想や構想に関する資質・能力	ア 感じ取ったことや考えたことなどを基にした発想や構想 イ 目的や機能などを考えた発想や構想	(ア) 感じ取ったことや考えたことなどを基にした発想や構想 (イ) 構成や装飾を考えた発想や構想 (イ) 伝達を考えた発想や構想 (ウ) 用途や機能などを考えた発想や構想	「思考力、判断力、表現力等」	
		(2) 技能に関する資質・能力	ア 発想や構想をしたことなどを基に表す技能	(ア) 創意工夫して表す技能 (イ) 見通しをもって表す技能		「技能」
	B 鑑賞	(1) 鑑賞に関する資質・能力	ア 美術作品などに関する鑑賞	(ア) 感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現に関する鑑賞 (イ) 目的や機能などを考えた表現に関する鑑賞	(ア) 生活や社会を美しく豊かにする美術の働きに関する鑑賞 (イ) 美術文化に関する鑑賞	「思考力、判断力、表現力等」
			イ 美術の働きや美術文化に関する鑑賞			
「共通事項」	「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して指導	ア 形や色彩などの性質や感情にもたらす効果の理解 イ 全体のイメージや作風などで捉えることの理解			「知識」	



美術科における指導と評価

5. 美術科でどんな子どもを育てるの？

豊かな感性と情操を培い、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成する



■ 私たちが美術科教師として教育に携わる意味

「中学校の美術科でどんな子どもを育てるの？」という問いに対して、あなたはどのような答えを用意しますか。また、私たちが美術科教師として教育に携わる意味とはいったい何でしょうか？

美術教育が大切である意味とは、「子どもたち一人ひとりが豊かな人生を送るため」といったらどうでしょう。子どもたちが「育成すべき資質・能力の三つの柱」を基に美術科独自の学びから身に付ける資質・能力を使って、自分に合った生き方を構築していくためにあるとしたら、私たち美術教師が担う責任は大きいものがあるのではないのでしょうか。

美術科の授業では、表現や鑑賞という造形活動が中心です

が、その活動を支えるものとして「造形的な視点(共通事項)」が重要視されます。これは対象を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光といった造形の要素に着目することの大切さを示すとともに、これらを用いて自分なりのイメージをもつ視点です。それによって子どもたちは対象を見て、感じて、考える学習や、見たこと・感じたこと・考えたことから自らの主題を生み出し、表現方法を創意工夫して表す学習に臨んでいくのです。

そうした学習を支えていく上で、美術科の教師には、個々の発想や構想をあたたく見守ることが求められます。そして小さな発想や構想の芽を確かなものとして捉えさせ、主題

を生み出す力につなげて育てていく工夫が大切です。そのためには、新たな発想や構想は対象に対する個々の愛着から生み出されるということを認識する必要があります。対象や題材は魅力あるワクワク感をもったものを提示したいですね。

また、鑑賞によって作品に出会うことで豊かな価値や美術文化を大切に育んできた先人たちの心情に触れて、何が人々の生活の中で大切なかを見出していきます。よさや美しさを感じ取ることを通して得た価値観こそ豊かに育みたいもの

■ 造形活動の可能性

子どもたちが作り出す社会やその社会の一員として活躍する未来はいったいどのように変化していくのでしょうか。その潮流は計り知れないくらい速度でやってきています。そのような社会で美術科はどのような学びをアピールできるのでしょうか。

学校現場でもGIGAスクール構想によって子どもたち一人ひとりがパソコンを操作できるようになりました。モニター上で学習成果の発表をするなど授業展開はアイデア次第です。社会では新たなアイデアを生み出す力を求めてくるでしょうし、さらに高度化されていくでしょう。

その一方で、社会では機械でできることは機械に任せ、人は人らしく心豊かな世界を創造することに注力すべきなのではないかという意見もあります。そのような多様な社会で自らの生活を構築していく力を発揮するためにはどのような教育が大切になってくるのでしょうか。

様々な活動を通し、新たなものを生み出す造形活動の一面

なのです。

自由な思考や表現を受け止められる美術の学びで、子どもたちは粘り強く試行錯誤しながら、仲間たちとともに心豊かな活動をつくり出す素地を身に付けていきます。これらの育みこそ、豊かな感性と情操を培う力に通じるといえます。美術科で育まれる子ども像をしっかりと見据えた教育を創造していきたいですね。

に着目してみたいと思います。

美術科の授業で子どもたちが行う表現や鑑賞といった造形活動の多くは体験的な活動です。粘土をこねる、木を彫る、色をつけるなど、人間の根源的な創造活動です。こうした活動の味わいから子どもたちは自らの感覚を通して造形的なよさや美しさ、楽しさを見出し、その経験から新たな感じ取り方を学びます。造形的な視点から対象の価値を豊かに感じ取る「感性を育む」という重要な視点です。ここで大切なことは、五感を働かせ、それぞれに感じ取った活動での実感がイメージを形成し、主題を生み出す際の基盤になるということです。この実感を基に創り出す経験は豊かさを見失わず、共感を得る魅力に通じていきます。

大切なことは、体験から学んだ味わいの記憶の中に潜む感性が鍵を握っているということです。この感性をどのように生かすかということが造形活動の可能性を左右するといってもよいのではないのでしょうか。

COLUMN：美術科教師の評価

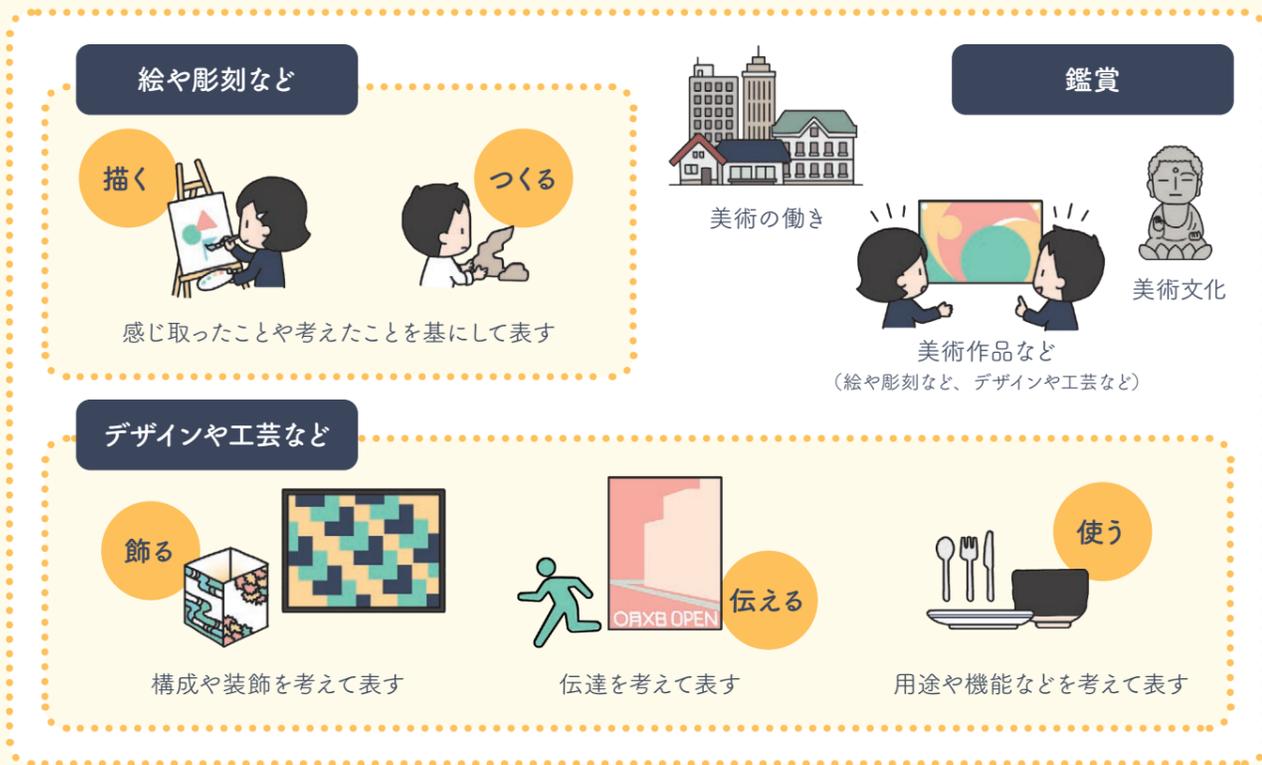
題材の学習が進むとともに、美術科教師は観点別学習状況の観点ごとに評価をしていきます。子どもたちが活動の中から学ぶという場合、教師には彼らの心の中ではどのような変化が生まれているのか見定める力量が要求されます。個々の思いに沿った学びが可能な教科であるからこそ、子どもたちの活動に寄り添い、彼らの傍にいて、学びそのものを教師こそが豊かに感じ取ることが大切です。

そして美術教師は、一方的に知識や考え方を教え込むのではなく、同じ視点で学びを見定めることが大切になります。

そのためには自分の中にある「子どもの心」を忘れずにいる必要があるのではないのでしょうか。

子どもたちの一つひとつの学びはとても小さなもので、放っておくと消えてしまいかねません。そのよさを見出し、子どもたちとともに大切に育む眼差しに大切な評価の視点が存在します。指導と評価は表裏一体なのです。彼らに活動を進めていくための動機と勇気を与えられるあたたかな評価の積み重ねにこそ子どもたちの心の「豊かさ」をともに成長させられる可能性が隠されているのです。

6. 美術科って何を学ぶの？



■教科目標と子どもたち

美術教育の目的とは何でしょうか。学習指導要領には美術科の目標が示されています。答えはそこに集約されています。

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- ①対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。
- ②造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
- ③美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。

教科
目標

ただ、目の前の子どもたちの姿と、この教科目標を直接結び付けるといことは、なかなか難しいことですね。

そこで、目標から具体的に子どもたちが活動し学ぶ姿に結び付くまでの教科における構造を考えてみましょう。私たちは、学習指導要領美術編に示された目標・内容を踏まえ、教科書を活用して、子どもたちが行う表現や鑑賞といった造形活動の題材を考え、その目標と評価規準を作成します。その上で計画を立て授業を展開するわけですが、私たちは、日々の授業にこそ大切な学習要素があることを自覚する必要があります。

教科書には美術の教科目標を支える育てたい資質・能力の三つの柱を基に、子どもたちが学ぶ題材について示されています。

また、教科の具体的な内容として「表現」と「鑑賞」に大別するとともに、「表現」を、感じ取ったことや考えたことなどを基に「絵や彫刻などに表す内容」と「伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表す内容」に分

けて示されています。

授業を行う上で気を付けたいことは、それぞれの内容において、高度な作品を生み出すことを目標としているわけではないということです。感じ取り、考え、自己と対峙しながらイメージを構築する力強さ、相手の立場に立ち、物事の価値に触れる優しさや客観的な思考、先人の培ってきたものとそ

■鑑賞における学びの重要性

鑑賞は「美術の目と心(造形的な視点)」を用いて形や色が感情にもたらす効果や、全体のイメージ、作風などを感じ取り捉える、美術科ならではの学習です。そこで大切にされることとして「自分は……」という視点があります。「自分にはこんな風に見えた」とか「こんな感じがした」など、感じ取ったことが起点になり、味わい、考え、味わい直す。その上でまた「自分には…」に戻ってくるような学習といえます。具体的な作品をつくり出すわけではありませんが、心の中に豊かな感情を生み出し、価値をつくり出します。そこで働くのが美術の授業を経験して身に付けた「美術の目と心」です。

鑑賞の学習では、友だちの意見を聞き、自分の感じ取ったことと照らし合わせることを通して味わい直すことも大切です。自分が気付かなかったことを違った視点から見直す学習は、個々の「美術の目と心」を豊かなものへと育てます。そのような経験を促すために、学習方法を工夫してみましょう。例えば美術室を語り合いやすい和やかな空間にし、一人では到達しえない領域に到達できたり、違った視点で対象を見つめ直したりする機会を生み出す実践があります。このような試みを鑑賞の学習に生かしてみたいと思います。

4人程の少人数のグループで自分の考えを出し合います。

の価値や味わいを感じ取る魅力など、それぞれの題材における学びを通して、日々教科の目標を少しずつ獲得していく子どもの姿を期待したいものです。そのためには美術教師が、偏りのないカリキュラムを立案してその中で育む学習内容を把握し、題材ごとのねらいを理解した上で子どもたちとともに、学びをつくり上げていくことが大切なのです。

4人の考えを交流させることで、打ち解けた自由な会話から鑑賞作品を多角的に、そして柔軟に見つめることができます。子どもたちが自分の心の中であたためていた思いとは異なる考えが、一人ひとりが感じ取ったことに刺激を与えます。その中には発見した事実もありますが、それぞれが感じた感覚的なものが多く含まれます。友だちの意見を聞いた子どもたちは「なるほど」と思った時点でその意見を自分の感じ方として取り入れ、無意識のうちに自分のものとしします。その納得の度合いが大きいほど、交わした感想は現実味を帯び、心の中で新たな意見として形づくられていきます。

一方、こうした学習は一見授業として進展したかのようには思えますが、各自の学習の深まりや豊かさという点では弱さを見せることもあります。そこで「今回の鑑賞の授業であなたはどのように感じ、どのような考えをもったのか？」という問いを、改めて投げかけてはどうでしょう。そのためには学び合った後の静かな、一人で思考する時間を授業の中に組み込むことが有効です。友だちの意見から生まれた新たな認識を咀嚼し、自分の感想とすり合わせる大切な時間がそれぞれの価値観を育むからです。

COLUMN：評価の「あと出しジャンケン」になっていない？

評価が学習や指導の改善に生きるものになるとは具体的にどのようなことでしょうか。先生方は題材の学習目標と評価規準を作成し、そして授業に取り組みます。その際に、学習目標とその意味や考えについて、生徒と共有することが一番大切なプロセスだと思います。学習目標について生徒と共有しないままでは、生徒は何を頑張るのか、また、題材の趣旨すらも明確には理解できないでしょう。そもそも学習目標自

体が明確なものでなければ、先生方も生徒がどのような姿になればよいのか、何を見取ればよいのかが分かりません。

そうした中で評価では、生徒は何を評価されているか分からず、自分の学習の理解にもつながりません。学習目標に向けて事前に共有しないまま、評定が決定した後に、なぜこのようになったのかを説明することがないようにしたいものです。

7. 美術科ではどんな授業が求められているの？



■美術科に求められる授業

美術の授業を受けに美術室にやってくる子どもたちは、どんな表情をしてやってきますか。美術室に入る前の子どもたちはどのような気持ちで過ごしてきたのでしょうか。美術室には「ワクワク」とした気持ちで来てほしいものです。

大切なことは美術を学ぶ環境を用意してあげることです。例えば、美術室に足を踏み入れた瞬間、気持ちが一変するような仕掛けがあるとよいですね。いつもとは何か違うものがある美術室を子どもたちは敏感に感じ取ります。「参考にす

るための作品や掲示がある」「初めて見る材料が用意されている」など子どもたちの興味を引き付け、想像力を働かせるものがあると題材の対象は彼らの心を満たします。

何より大切なことは、指導を始める先生方が「ワクワク」してこれを仕掛けていくということです。教師の「ワクワク」が、美術の授業に臨む子どもたちの「ワクワク」を生み出すのです。授業は子どもと教師が一緒につくり上げるものなのです。

■発想の産声

子どもたちは、表現や鑑賞といった造形活動の中でいったいどのようなタイミングで新たな発想を生み出していくのでしょうか？ 授業を俯瞰してみると発想が生まれやすいタイミングがみえてきます。活動の開始とともに発想を生み出せる生徒もいますが、発想の多くは授業のねらいや、内容を子

どもたちが把握したのちに生まれてきます。

具体的な制作活動に入る前に最初のポイントがあります。私たちがアイデアスケッチの時間として設定する時間です。ここでは友だちとの意見交換や参考作品の鑑賞といった学習が有効になります。対話したり、アイデアを評価し合ったり

する活動は、自分のアイデアを確かなものにしてくれます。教師もそこに加わりましょう。アイデアスケッチを描くことが目的ではないのです。

また、発想する力は、静寂の中から生まれることが多いことも忘れてはいけません。グループワークの後には自分と対峙する静かな時間が大切になります。発想の卵が生まれ、頭の中で一つの形に結び付いていく瞬間は孤独なのかもしれませんね。教師もこの瞬間に立ち入るべきではありません。

さらに重要な時間は、制作途中の試行錯誤の時間です。より確かなものを、よりよいものをという学習の深化が、新た

■学習評価の充実のために

先生方は日頃から、子どもたちが充実した表情で主体的に学習する時間を共有するために日々努力されていると思います。それを実現するために大切なことは、それがどのような学びのための授業なのかという視点です。どのような学習目標があるのか、それは子どもたちのどのような資質・能力へとつながっていくのかが抜け落ちては授業でなくただの作業に終わってしまいます。そうならないようにするために、学習指導要領に整理された教科の目標・内容・方法があり、主たる教材としての教科書があるのです。美術科の学習評価を有意義なものにするという視点から、そのポイントについて大まかに整理しておきたいと思います。

P.16でも述べた通り、美術科の学習内容には、大きく分けて表現と鑑賞という二つの領域があります。このうち、表現の内容としては、自分の思いや考えを「絵や彫刻など」に表現する「A表現(1)ア」の活動と、他者や社会との関係を考へて「デザインや工芸など」に表現する「A表現(1)イ」の活動があります。また、「B鑑賞(1)」は、絵や彫刻、デザインや工芸などに表現された美術作品、自然や生活の中の美術の働き、文化遺産などのよさや美しさを感じ取り味わう活動です。

今回の学習指導要領では、生徒の学びを深めるために、表現と鑑賞を相互に関連させる学習の充実を図り、「A表現(1)ア」「A表現(1)イ」のそれぞれにおける発想や構想の能力と「B鑑賞(1)」の能力を総合的に育てることができるよう学習指導を工夫することを促しています。

また、こうした内容・方法を踏まえ、これらを題材化して授業をする際に抑えておくべきこととして、領域ごとの実践

な試行錯誤を生みます。ここでの思考とともに現れる気付きを発想力と結び付ける教師の言葉かけを大切に、新たな発想が浮かび上がる瞬間を見守る教師の目が大切になります。産声を上げた発想に対する最初の評価が、生み出された発想にエネルギーを与えるのです。



の軸となる指導事項が示されています。中学校1学年「A表現(1)ア」を例として紹介します。

まず、美術科における「思考力・判断力・表現力」の要となる「発想や構想」に関する指導事項は、次のアとイです。

ア 対象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出すこと。

イ 主題などを基に、全体と部分との関係などを考へて創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること。

併せて、「発想したことや構想したことを実現するために活用される「知識・技能」のうち「技能」に関する指導事項としては、

ア 形や色彩などの表し方を身に付け、意図に応じて材料や用具の生かし方などを考へ、創意工夫して表現すること。

イ 材料や用具の特性などから制作の順序などを考へながら、見通しをもって表現すること。

が示されています。同時に、指導事項を基に、授業の中で生徒が造形的な視点を働かせながら学習を進めるための「知識」として、

ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。

イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。

という共通事項が明示されています。

子どもたちが充実した表情で主体的に学習する時間を共有するためには、これらの指導事項と共通事項の関係をよく考へながら、題材の設定と展開を工夫し、学習指導と学習評価の充実を図っていく必要があるのです。

8-1. 「知識・技能」は何を評価するの？



〔共通事項〕

- (1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 形や色彩、材料、光などの性質やそれらが感情にもたらす効果などを理解すること。
 - イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。

■ 「知識・技能」は何をみるの？

中学校美術科における「知識・技能」は学習指導要領の指導事項(P.12参照)の、知識は〔共通事項〕、技能は「A表現」(2)の技能に関する資質・能力を評価するものです。

〔共通事項〕とは、「A表現」及び「B鑑賞」の学習において共通して必要となる造形的な視点を豊かにするための項目です。これらの指導事項を知識として理解することができて

■ 「A表現」での知識の評価

表現の学習活動の中で発想や構想を基に何かを表す時に、何となく描いたり、色を塗ったりするのではなく、「造形的な視点を豊かにするための知識」として、形や色彩の性質などを理解しているか、イメージで捉えることなどを理解しているかを見取ります。例えば、「あたたかい気持ちにしたいからこの色を選んだ」、「こんなイメージにしたいからこの形にした」など〔共通事項〕の視点を理解しているかを言葉

いるか評価します。

しかし、ここでいう知識の理解とは、単に「赤系は暖かい感じ、明度の高い色は軽い感じ」のように暗記して覚えるといったような理解ではなく、学習の中で生きて働く知識として実感的に理解していることが大切です。

などで拾い上げていくことが大切です。

そのためには、生徒の発言を聞いたり、そのことが聞き取れるような意図をもったワークシートなどを準備したりする必要があります。そして後にも述べますが、知識の側面のみで評価するのではなく、最終的には技能と一体的に評価していくことになります。ですから、授業の過程での知識の見取りは、〔共通事項〕の視点をどれだけ理解しながら学習できているか、

生徒と対話したり、時には〔共通事項〕について考えられるような発問を行ったりしながら、見取ることが必要です。

具体的に、連続模様を考える初期段階(アイデアスケッチ)での知識の見取りについてみてみましょう。

この生徒は「明るい気持ちでお花のように優しい」といったイメージからこの形を考えました。また、そのイメージからオレンジや黄色などの色を使う予定であることが記されています。つまり、〔共通事項〕アの形や色彩などが感情にもたらす効果などを意識して、アイデアスケッチを描いているといえるでしょう。ここではいわゆる学習の中で生きて働く知識として、理解していることが伺えます。

■ 「B鑑賞」での知識の評価

鑑賞の学習評価には、技能が位置付けられていません。ですから、より知識の観点が重要になってきます。漠然と作品を鑑賞させるのではなく、作品をどのような視点で鑑賞させるのかを指導者である先生が、まず考える必要があります。その際に〔共通事項〕の指導事項を意識すること、とりわけ学習指導要領解説美術編「内容の取扱いと指導上の配慮事項」(1)に〔共通事項〕ア、イそれぞれの指導事項についてより

■ 技能の評価

技能の評価は、発想や構想をしたことを基に、意図に応じて表したり、見通しをもって表したりする状況の評価します。学習の過程では、必要な技能が身に付いているか、材料や用具の特性を生かした表し方ができているかを見取ります。その際、それができていない生徒に対しては、様々な手立てを

■ 「知識・技能」として総括する

「知識」「技能」のそれぞれの観点については、学習活動の中に適切に位置付けながら、指導の改善に生かしていくことを中心と考えていきますが、最終的な評価としては「知識」と「技能」を一体的に評価していきます。

「A表現」においては、学習の過程が作品として表れるので、完成した作品からも評価することが考えられます。その際、単に「きれいに塗れている」「上手く形付けられている」といった表面的な出来栄だけを評価するのではなく、知識である

アイデアスケッチ



太陽のように明るい気持ちでお花のように優しくという意味を込め、太陽にもお花にも見えるようなデザインにしました。

明るいイメージにしたかったし、太陽をイメージしたので、暖色のオレンジや黄色を使いました。

詳しく解説されている視点を学習活動の中に生かすことが考えられます。例えば立体作品の鑑賞であれば量感や動静を捉えることを視点にしたり、美術文化などを扱う際には作風や様式などを視点にしたりすることが考えられます。鑑賞においても、生徒が〔共通事項〕の視点をもち、豊かに造形を捉えられるような意図的なワークシートや発問を準備する必要があります。

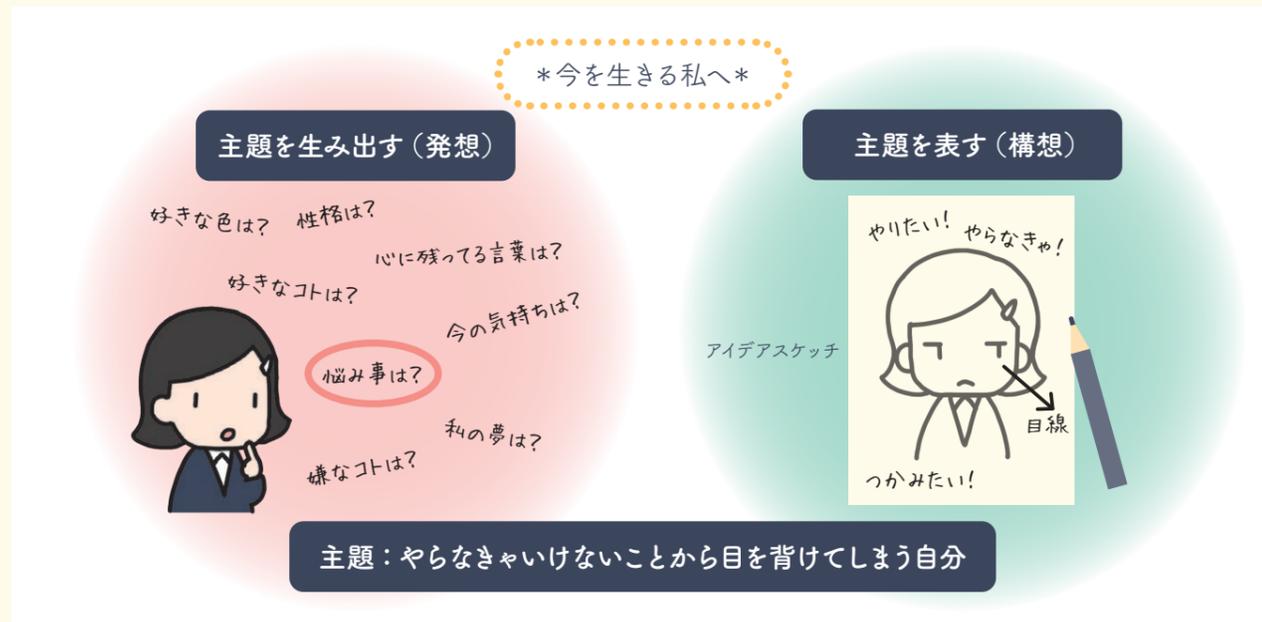
講じていくことが必要です。

予め、どのようなところでつまづくかを予想して手立てを準備していくほか、生徒の状況によって指導の方法を変えていくなど、指導者の授業改善にもつながります。このことは他の観点でもいえることです。

〔共通事項〕の視点をどのように生かして表しているかを合わせて見取ることが大切です。

例えば、前出のアイデアスケッチの生徒の場合、「明るい気持ちでお花のように優しい」といった意図が最終的な作品に技能として表れているかを一体的に見て評価していきます。作品だけでは分からない場合や、初期段階とは表したい意図が変更されている場合もあるので、制作のプロセスが分かるワークシートも大切な評価資料となります。

8-2. 「思考・判断・表現」は何をみるの？



■発想や構想に関する資質・能力の評価

「思考・判断・表現」は学習指導要領の指導事項の「A表現」(1)の発想や構想に関する資質・能力と「B鑑賞」の鑑賞に関する資質・能力を評価するものです。発想や構想の学習と鑑賞の学習の関連を図りながら育成した資質・能力を評価していきます。

「技能」の指導事項に「発想や構想したことなどを基に、表現する活動を通して～」とあるように学習の初期段階に位置付けられることが多いと考えられます。初期段階ではまず、生徒が主題を生み出せるようにします。「感じ取ったことや考えたことを基に表現する活動」においても「目的や機能を考えて表現する活動」においてもまずは「どのようなことを表したいか」を思い付く、つまり主題を生み出すことが、その学習の基軸となります。ただし、当たり前のことですが、学習の趣旨を伝えてただ「主題を生み出しなさい」というのも生徒があふれるばかりの主題を生み出すとは限りません。主題を生み出せるようにするためには、魅力的な導入を工夫したり、題材と関連した鑑賞活動を行ったりして、題材が生徒自身にとって身近なものに感じられるようにすることが大

切です。思わず「こんな風に表してみたい」と感じさせる仕掛けが必要となってきます。そうした発想や構想をしている姿を捉える一つの手立てとして、ワークシートなどを活用することが考えられます。初期段階では、生徒の考えは漠然としていることが多いので、言葉をどんどんつなげていくようなマッピングや、先生が考えたたくさんの問いから自分の主題を徐々に明確にしていく方法などを用いて、生徒が考えを言葉にしていくことができるように工夫します。そして、その生徒が生み出した主題を確認していくことが初期段階での評価につながります。学習の初期段階でこの評価を行うことで、主題が生み出せていない生徒への手立てを行うことができます。まだ主題が生み出せていない生徒に対しては、例えば個別に問いかけたり、友だちの主題を聞かせたりして主題を生み出せるように支援します。

学習過程の後半では、主題を基にどのように表していくかを考える構想の能力が発揮されてきます。実際に作品制作に入り、制作途中の作品からも見取ることができます。初期のアイデアスケッチから変更したり、途中の作品を相互鑑賞し

てアイデアを練り直したりして、さらに自分の表したいことを構想していく様子が見られる段階です。この段階での評価も決定的なものではなく、構想がまとまらない生徒を中心に

■鑑賞に関する資質・能力の評価

「A表現」の題材における鑑賞活動の評価については、題材の指導事項に合わせ、発想や構想の能力と相互に関連していくように工夫します。例えば導入段階で作者の心情や表現の意図と工夫について考える機会をつくったり、制作後に完成した作品を互いに鑑賞したりし、作品から感じたことや考えたことを説明し合う活動などが考えられます。また、目的や機能を考えた作品の鑑賞であれば、実際に使ったり、どのように伝わっているかを感じ取ったりするなど、実感的に鑑賞する活動が考えられます。そうした活動を通して、生徒の発言やワークシートから鑑賞に関する思考・判断の状況を見取ることができます。この際も、どのような視点から鑑賞するのかを明確にした発問やワークシートが大切です。

「B鑑賞」における鑑賞の評価については、鑑賞の指導事

指導することに主眼を置き、「十分満足できる」状況の生徒が見取れた場合には、メモなどを取り、授業後の総括に生かしていくことが考えられます。

項のどれに位置付けられた学習なのかを明確にする必要があります。生徒の実態やこれまでの学習経験を考慮しながら、題材設定していくことが大切です。その際〔共通事項〕に示された造形的な視点を豊かにするための「知識」を活用して、教師が発問したり、生徒が視点をもったりすることができるようにします。鑑賞の授業の形式については、様々な形が考えられ、授業中の発言や授業後のワークシートなどで見取ることが考えられます。鑑賞の授業では対話しながら授業を進めていくことも多いと思いますので、1時間の授業の中ですべての生徒の状況を見取るとは難しいと思います。教室全体を俯瞰し、鑑賞の視点をもつことができている生徒に、改めて問いかけるなどの支援をし、授業過程で評価していく工夫が大切です。



■「思考・判断・表現」として総括する

学習過程で記録した評価を基に、完成した作品や作品についての記述、ワークシートなどから再度、授業外でも評価情報を確認していきます。生徒が表したかった主題などがどのように工夫されて表れているのかなど、作品だけでは読み取れない部分を、記述された言葉などから見取り、授業中の見取りよりも高まった部分があれば、再評価していきます。鑑

賞の評価についても、授業内だけでは読み取れない部分を、ワークシートなどの記述を基に評価を決定し、発想や構想の評価と鑑賞の評価を合わせて最終的な評価とします。その際、両者の評価に差異がある場合には、活動のねらいによって、どちらの能力を重くみるか、事前に決めておくことも必要です。

8-3. 「主体的に学習に取り組む態度」って？

■一番悩ましい評価の観点

新しい学習評価の3つの観点の中で、先生方の頭を一番悩ませるのが、「主体的に学習に取り組む態度」ではないでしょうか。また、この観点は美術科に関わらず他の教科の先生にとっても、評価するのが一番難しいといった声を伺います。

「主体的に学習に取り組む態度」は、「知識及び技能を獲得

したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取り組み」と「自らの学習を調整しようとする」二つの側面から評価することとなっています。では、美術科の授業ではどのような姿を評価していくのでしょうか。

■授業の中で見取る

この観点は生徒の「態度」を評価することからも、授業中の生徒の姿そのものが、大切な評価材料になります。どのように授業に対して取り組んでいるかを授業計画の中のある程度まとまった時間の中で、見取っていきます。その際、一人ひとりの評価を細かく記録していくというよりは、教室全体を俯瞰し、困っている生徒を中心に見取り、その生徒への手立てを講じていくことが授業内の評価の中心となります。

そのためには「主体的に学習に取り組む態度」が発揮されている姿とはどのような姿なのかを、事前に予想しイメージしておくことも大切です。例えば、主題を生み出す際のワークシートがマッピング形式のものであれば、一つの言葉からいくつもの言葉を書き出し、自分の思考を広げようとしている姿、アイデアスケッチを描く時に、一つ描いただけで決定

とするのではなく、時間内に改善を試みながら粘り強くいくつものアイデアを描いている姿など。また、鑑賞の場面では作品などをじっと見つめ、自分の考えを広げようとしている様子や、自ら〔共通事項〕の視点から発言しようとしている姿などが考えられます。授業の中にはそうした生徒の姿がたくさんあるはずです。そうした姿を捉えつつ、主体的に学習に取り組むことができない生徒に対しては、個別に指導の改善を行っていくことが大切です。

すべての生徒を1時間内で均一的に見ていくことは不可能ですので、題材展開の全体を通して、継続的に支援しながら、時には、まだ見取れていない生徒に対して、「今日は一番に声をかけてみよう」など毎時間の計画を考えるきっかけにしていけるとよいですね。

■授業外で見取る

生徒の授業の様子から見取ることが大切であると述べましたが、さらに大切なことは、生徒がそれぞれの題材において「知識・技能」を活用して「思考・判断・表現」することを通して、自身の学びを実感できているか、その題材が自分にとってどのような意味をもっているかを、題材目標との関係で言葉にできるかどうかです。こうした情意面の変化を評価する上で役に立つのがワークシートや学習の計画表、ポートフォリオなどです。これらを使って、毎時間、あるいは題材展開の節目ごとに各自の振り返りのコメントを残しておくことで、ど

のようなことができて、どのようなことができなかったのか、また、それができるためにはどのようにしていったらよいかなど、自らの学習を調整しようとする姿を捉え、題材全体を通した生徒の変容をつかむことができるようになります。

現在は、一人一台のGIGA端末を利用して制作途中の作品を画像として記録し、制作の過程を残すなどして、その変化や取り組み状況などを評価資料とすることもできます。生徒の学びを様々な角度から見取ることで、主体的に学習に取り組んでいたかを判断し、授業改善に生かしていきたいものです。



■「主体的に学習に取り組む態度」の総括

総括の際には、それぞれの授業内で見取った評価と授業外で見取った評価を合わせて総括していきます。この評価は「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けようとして、発揮しようとしてすることへ向かう主体的な学習に対する態度を評価するものなので、他の2観点と深い関係の上に成り立っています。そのため「知識・技能」「思考・

判断・表現」がCで、「主体的に学習に取り組む態度」だけがAといったことは、とても考えにくいと思います。もしそのようなことが起こる場合は、その理由を説明できるようにしておくことやその根拠となる資料を準備する必要があるでしょう。

■参考文献

「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編」平成29年7月
国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 美術」令和2年3月

COLUMN：学習評価は誰のため

学習評価とは誰のためにあるものなのかを考えてみましょう。評価というと学期末の評定と関連して考える先生方も多いと思います。しかし、評価とは、決して生徒を「この子はA」「この子はC」とラベリングしていくことではなく、授業内での評価を指導の改善に生かし、どの生徒についても学習

のねらいを実現できるようにしていく営みです。このことは、生徒にとっては学習の励みとなる営みであり、先生にとっては授業の改善、題材の改善、生徒のよさを見つけていく営みであると考えています。生徒が評価されることに喜びを感じ、励みになるような学習評価を目指したいものです。

9. 指導計画と評価ってどうするの？



■生徒たちが育ってきた背景を知る

あなたの授業を楽しみにしている子どもたちの姿や背景はどのようなものですか。まずそのことについて考えてみてください。すべては生徒理解から始まるといっても過言ではありません。生徒たちは、どのような環境で学び、育ってきたのでしょうか。学校としてどのような生徒を育てたいのかという【共通目標】に加え、地域の自然環境、風土、歴史、人々の暮らしについて知ることで、より適切で効果的な、未来につながる学びとなると考えられます。そこでは、地域の宝を活用するヒントが見つかるかもしれません。その時、「こんな学習活動を通して、学びを深めたい」という具体的な姿が見えてくるはずです。1年生ではいろいろな経験をさせてく

ださい。2・3年生では1年生で身に付けた資質・能力を柔軟に活用して、より豊かに高められるように配慮してください。その際、学習指導要領では2年生と3年生の学習内容について2年間を通して行うと記述されていますが、発達の違い(適時性)を意識して、学びの目標を考えるようにしましょう。中学校生活で最も活動的な2年生と、義務教育を終え、これから自分の意思をさらにしっかりもって生きていこうとする3年生とではおのずと学びの形や方法にも変化が現れてくるのではないのでしょうか。そして、考えた題材を、子どもたちの顔を思い浮かべながら並べてみましょう。表を作り付箋などを活用してみるとよいかもしれません。

■指導計画のバランスって？ 創造の心・感じる心を大切に

- 鑑賞と表現は相互に働き合う活動です。そして、表現活動はもちろん、鑑賞の活動も創造活動です。自ら考えつくり出す美術を実現するための鑑賞と表現の指導計画を立ててください。
- 表現活動においては、「感じ取り表出する美術」「使ったり伝えたり飾ったりする美術」、それぞれにおける「立体と

平面」を学習内容とすることが求められています。これを表にすると次のようになります。1年生と2・3年生を通じて、バランスよくこれらを実施できるようにしてください。

- 3年生という時期は義務教育最終学年であり、自己の内面を深く見つめたり、社会との関わりについてより客観的に迫り学びを深めたりすることができる時です。一方、

学年	感じ取ったことや考えたことなどを基に、 絵や彫刻などに表現する活動		伝える、使うなどの目的や機能を考え、 デザインや工芸などに表現する活動	
	描く活動	つくる活動	描く活動	つくる活動
第1学年	○	○	○	○
第2学年	○			○
第3学年		○	○	

- 2年生という時期は様々なものに目を向け多様性を認めたり上級生へのあこがれが強まったりする時期とみられます。それぞれの発達の段階を捉えた題材こそ肝要です。前述の内容と併せて計画を考える必要があります。
- 学習内容のバランスと重なりますが、学習目標の視点か

- らも確認をしてください。使うことを目的とした活動で始めたのに、気が付いたら主張ばかりが強い独りよがりの表現になっていたりしませんか。
- 鑑賞においても、作品としての扱いの他、生活の中の美術や文化の面からも扱えるようにする必要があります。

■3年間の指導計画と評価計画を立てよう

美術科として、その題材で身に付けさせたい力は何ですか。「美術科の学習目標」を捉え「造形的な見方・考え方を働かせる」ことが大切です。指導と評価の流れを大きく示すと次のような例が挙げられます。

- 1: 学校目標と教科目標・教科の指導内容を確認し3年間の指導計画を立てる。
- 2: 小学校との連携や生涯学習などについても配慮しながら題材配列を考える。
- 3: 教科及び学年の目標と照らして題材目標を作成する。

■学習評価のねらいと評価の方法と工夫

教師は常に生徒の活動の様子を観察し、必要に応じて声をかけられるようにしたいものです。対話をする中で自然に指導と評価を行うことも多いのではないのでしょうか。

- 「主体的な学び」のために、学びの環境設営(材料置き場・道具・動線・掲示物・作業スペース)を工夫することができます。また、ワークシートやポートフォリオ等の工夫で生徒自身が学びの変容を自覚できるようにすることも

■生徒へ周知したいことは、保護者にも

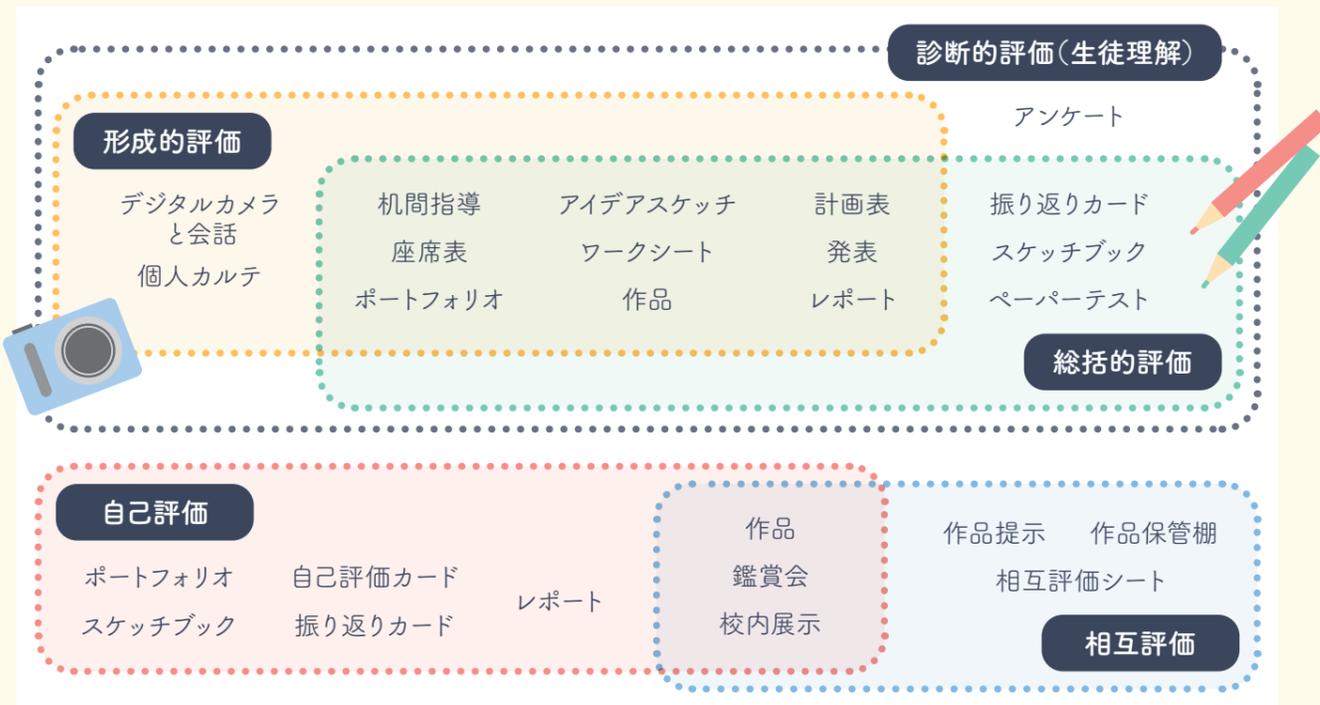
「学習活動内容」「学びのねらい」「学習評価」「生徒、教師の準備」は生徒だけでなく保護者にも知らせておきたいところです。題材名は、活動(表現・鑑賞)の広がりや生徒の学習意欲、動機付け、目標の意識付けにとっても重要です。題

- 4: 「内容のまとめ」と「評価の観点」を確認し、題材ごとの評価規準を作成する。
- 5: 指導と評価について、時期やタイミング、方法について計画する。毎授業ですべての観点を評価できるわけではない。
- 6: 授業を行い、指導を通して観点ごとに形成的、総括的評価を行う。
- 7: 観点ごとに総括する。自身の授業の振り返りも同時に行う。

- 大切で。
- 「対話的な学び」のために、机の配置や発表の場の設定を工夫することなどが挙げられます。
- 「深い学び」のための教師の仕掛けは無言の大きな力を持ちます。例えば、生徒の意欲を喚起するための調べ学習の用意、(ネット環境、素材体験、実験場)や他教科との連携、社会とのつながりなどを考えてみてください。

材名は最初に生徒が目にする題材目標としても機能します。生徒の心に響く言葉を考えてください。それは、保護者に向けての教科理解を促すことにもつながります。

10. 一人ひとりのよさを見取る評価方法は？



指導と評価の具体的な工夫

評価には妥当性・信頼性が大切だといわれますが、それはどうなのでしょう。どうしたら、それらを満たすことができるのでしょうか。一番大切なことは、生徒を知り、理解することではないでしょうか。そして、コミュニケーションを通して、生徒が考えていることや困っていることを捉えながら生徒の学習活動を促し指導することが、指導と評価にとって大切です。教師にとっては学習評価もまた指導の一環です。生徒を知るには、生徒の声を聞くことが最も重要なのです。しかし、いつも生徒はこちらが考えているような形で情報を出しているとは限りません。生徒の声を少しでも多く、的確に捉えるために私たちは万全を尽くしたいものです。学習評価とはねらいを明確にもった指導そのものです。机間指導の中で対話を進めるにしても、大変時間のかかるものであり、現実的にどこまで可能なか心配になってきます。いつ、どこでどのような方法で評価活動を行い、評価資料を集めるのか指導計画の中にある程度位置付けておくとよいでしょう。

そのために考えることは以下の通りです。

- ①何を規準に評価するのか
- ②何を通してどのように評価するのか
- ③いつ評価するのか
- ④誰が評価するのか

①に関しては学びのねらいに向かって「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を相互に関連させながら育成するということです。ここでは、学習評価の効果を考えて次の4つに分けて提示します。

1. 形成的評価、指導と評価の一体化を図りながら直接生徒と関わり、育てる。
2. 総括的評価、題材における目標や評価規準を生徒がどのくらい実現できたかをまとめて示す。
3. 生徒自身の自己評価。
4. 学び合うことを通した相互評価。

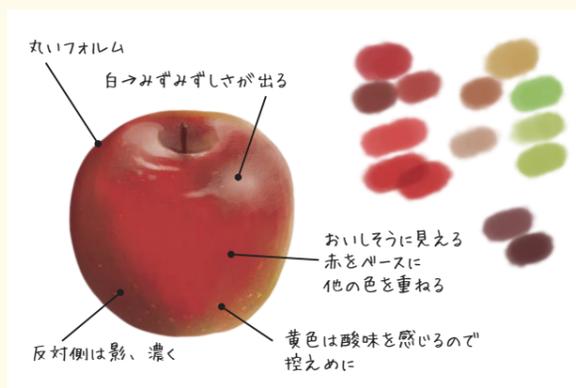
1. 授業記録・観察・声かけによる評価 ～指導と評価の一体化を目指す形成的評価

- 机間指導
 - 最も基本的な学習評価の機会であり、直接的に生徒を見取ることができます。ちょっとした言葉がけて生徒の意欲も変わってきます。教師は褒め上手であってほしいです。それは生徒が目指しているところに気付くことであり、困っている生徒に適切なアドバイスを出せるということです。的外れを褒めても生徒には刺さらないことがよくあります。机間指導の中でのアドバイスは生徒にある方向を示すというよりは、生徒が自ら考えて進んでいけるだけのパワーを与えることにあるのではないのでしょうか。褒め方をパターン化させないことにも気を付けたいです。
- デジタルカメラ、タブレット端末など
 - 生徒の活動は常に変化の中にあります。デジタルカメラやタブレット端末を活用して、記録を取ることを通して、生徒とのコミュニケーションのきっかけになったり、深まったりすることもあります。必要なタイミングで生徒の活動を確認するように映像記録を残すことは、作品のみを評価するだけでなく、創造活動の過程を豊かに支援するという教師の意識を明確にすることにも結び付きます。デジタル機器を使った授業記録は生徒自身で行うこともできます。写真を撮ることだけでなく、鑑賞時の言語記録も可能です。
- 座席表や指導手帳など
 - 生徒の発言や、生徒へのアドバイスなど、特に気になったことなどを記録しておくといよいでしょう。その記録は次の授業で、どの生徒が、どのような指導を必要としているかを示しています。しかし、メモをしながら授業を行うことは現実的ではありません。強く印象に残ったことなどを名簿などに授業後にメモすることがよいかと思えます。座席表にメモするというのも考えられます。座席表はトポスとの関係からも生徒の活動状況などとも結び付きやすくなります。トポスはギリシャ語で「主題」を意味し、記憶術で重視されることもあります。教室の様子や生徒間の活動などを関連付けて記憶することができます。
- ポートフォリオ
 - 生徒に作らせている先生も多いかと思えます。個々の生徒が、自身の学習目標や学習成果と課題、目指すところについて情報を正しくみるために有効です。それは教師が生徒を知る時の心強い資料にもなるのではないのでしょうか。前述の座席表へのメモ記録のようなものと併せて整理することもできると思われれます。生徒一人ひとりを見るということは簡単なことではありません。美術科教師の私たちは、生徒一人ひとりとその個性を前提に、一人ひとりを見て評価していかなくてはなりません。それは医師が活用している個人カルテという考え方に通じるところがあると考えます。



■ 2, 提出物・回収物による評価 ～総括的評価として記録に残す

- ワークシート、振り返りカードなど(学習プロセスの見える化)
 題材目標の実現を考えて作りましょう。発想の段階でのワークシートはアイデアを形にしていって大きな意味をもつものです。題材に応じて教師が用意することが多いでしょう。そこには、教師の指導の意図が含まれますので、その意図に準じて評価をすることができます。活動の記録として、毎回あるいはタイミングをみて生徒が記録をとれるようにしましょう。
- 学習計画表(生徒がつくる学習のプラン)
 制作の計画を立てさせましょう。あくまで計画であって、途中でいくらでも変更ができるようにしておきたいものです。設計図であっても、試行錯誤に対応できるものが望ましいです。変更前をなかったことにするのではなく、常に考え続ける姿勢を大切にしたい旨、教師と生徒で共有しておくことが大切です。
- アイデアスケッチ(思考と試行の足跡)



生徒の思考や試行をみる上で重要な役割をもちます。生徒自身が資料を集めたり、考えたことを書き留めたりする活動こそ創造活動の源ともいえるでしょう。スケッチに関しても、見栄えを評価するのではなく、生徒の活動内容を評価するようにしたいものです。

ここでの目的は、イメージを具体にするための試行であり、活動を通じた思考であるからです。生徒自身にとって最も活用しやすい内容や形態を考えることができているかがポイントです。

- ペーパーテスト(獲得した知識の質を問う)
 指導したことを問い、学びがどのように生徒の力になっているかをみようとするものです。ただし、それは「考えさせる内容になっているか」「知識を生徒自身の創造活動

に役立てられるものになっているか」という視点を忘れてはいけません。別のいい方をすると、単なる一問一答の内容だけになっていないでしょうか。知識は役立ってこそ知識。そのことをおさえながらのペーパーテストでなければならぬと考えます。このことは特に「鑑賞」において起りやすいかもしれません。「鑑賞」というものが創造活動であるということを改めて考えてみる必要があります。

- 作品(「知識・技能」×「思考・判断・表現」の集大成)
 生徒が提出する作品をみる時は、教師は作品の何をみて、どう評価することが学びのねらいに合っているのかを考えましょう。丁寧さやデッサン力に偏った評価から自由になり、美術で身に付けさせたい資質・能力について考えていくことが大切です。限られた授業時間の中で、生徒の活動は思うように進まなかったり、途中で大きな困難に出会ったりすることもあるかもしれません。それらすべてを通して作品をみてほしいです。最悪、授業最終日に作品が木っ端微塵になって消滅したとしても、学習活動の評価はできるはずで、(※そのことによる生徒へのフォローも必要になってきます)
- スケッチブック、レポート、ポートフォリオ(学びの履歴を整理・活用)
 活用することで資料やデータを生徒自身に整理させ、管理させることができます。さらにICTを活用し、紙によるものだけでなくデジタルで残すことも考えられるようになってきました。例えば、プレゼンテーションソフトなどは、プレゼンのための1ページを記録の1ページとし上手な整理に使うことができそうです。タブレット端末などを使用することにより撮影・記録・検索・整理・発表などを一つの機器で実施することが可能です。

- 発表(学習したことの音声化)
 発表する活動から評価することもできます。題材展開のどこで実施するのかによって評価基準を定め、知識・技能の確かさや発想・構想の豊かさを質的に評価します。

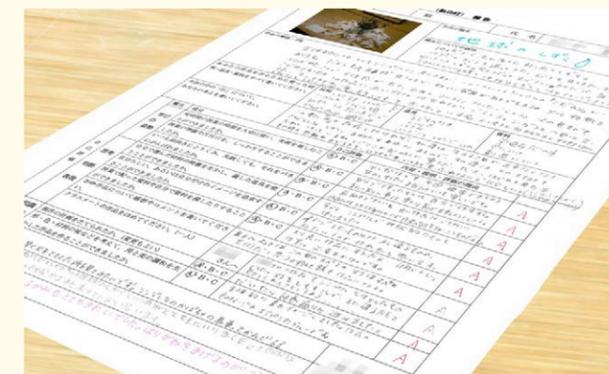


■ 3, 生徒自身による評価 ～自己実現・自尊感情を高めるために

学習評価は、教師だけがするものではありません。自分のことを自分でしっかり評価できてこそ学びが楽しいものになり、深まり、継続的なものとなります。生徒自身が何をしたいのか、どこに目標を置いているのかということについても改めて考えることにもなります。正しい自己認識こそ、自己肯定感にもつながるものです。作品、レポート、振り返りカード、自己評価カード、ポートフォリオなどを作りながら、生徒自身が活動を振り返り、自己評価することができます。その時、単純にABCや数値で評価をさせることが必要なのではなく、その根拠について考えられるようにしてください。作品解説を試みたり、活動を振り返ったりする時に、この点について事前に伝えておくとういでしょう。

生徒が、自身の作品が完成するまでの一連の流れをスケッチブック、ポートフォリオなどにして振り返ることができる

ようにすることで、自身のこれまでの学びを価値付けたり、これからの進み方を考えたりすることにつながります。生徒たちには、自分の創造活動の足跡を大切に、時には振り返りながら、できたものも自分の一部として大切にしてもらいたいと願っています。



■ 4, 生徒相互による評価 ～学び合い・伸ばし合い

- 「鑑賞会」「作品掲示」「校内展示」などはいまでもなく相互鑑賞であり、相互評価の場です。「作品保管棚」などがオープンな環境であれば、それも生徒同士の相互評価の場となります。※展示には、教育効果を考えることとともに配慮が必要です。
- 美術室の設定を工夫することで、生徒同士の相互評価の場をつくることができます。完成した作品の掲示・展示は学び合いの場です。そこは、壮大な表現の実験場になります。制作中の場は互いに刺激を共有できる場となります。他の人がどんな素材を、どのような技法を使っ

て表現しているのか見合うことができます。そこには有意義な会話が生まれ、互いを認め合うことが期待できます。

- 「相互評価シート」を作成することもできます。その時、3観点を基に評価の観点を的確に分かりやすく示す必要があります。また、自分が友人に与えた評価と、友人からもらった評価の両方を保有できるように工夫することで、学びの協調性が高まります。
- ※ 思考は言語であり、人は言語によって思考するといえます。その意味でも言語活動を大切にしたいものです。



ワークシートで学びを拡げよう

生徒にワークシートを示すことによって、学習のねらいを明確にすることができます。
生徒自身が自分の思いや考えを整理し、発展的に創造活動につなげることに役立ちます。

※この題材は形や色と空間を媒介とした立体的な自画像

◆学習のねらい

表現のイメージを言語や記号などで、考え、整理し、主題を見つける。

◆評価の観点

【思判表】自分の主題を見つけ、その主題を表す表現の方向性を模索する。

◆学習のねらい

心象を探る行為のきっかけとし、形のあふ無しにこだわらず、自分の中にあるものを見つめ、言葉にする。

◆評価の観点

【思判表】今、感じていること、考えていることを言葉にし、イメージをさぐる。

◆学習のねらい

自分の主題に基づいて、想いや考えを立体として表現するためのイメージを視覚化する。

◆評価の観点

【知技】材料の特徴なども考えて表現したい立体の姿の具体をスケッチする。
【思判表】自分のイメージを色や形、素材や材料の特徴を生かして表すための構想を練る。

◆学習のねらい

イメージを実現するための技法や独自の素材など、表現方法について追究する。

◆評価の観点

【思判表】イメージを具体化するためにできることを考える。試してみて、変更も可。

「わたしの形を～イメージの塊を求めて～」 氏名

■ 私の心の中をのぞいてみよう

- 「気になっていること」
- 「最近うれしかったこと」
- 「今考えていること」
- 「大切にしていること」
- 夢・希望・未来……

■ 私がこの作品で表現したいのは……

■ 完成構想図

■ 表現方法について考える

- ・素材 テラコッタ粘土
- ・技法
- ・着色
- ・表面加工
- ・その他

■ 学習の流れ

- ・題材の理解
- ・素材・技法について
- ・形の試行と決定
- ・テラコッタによる制作
- ・表面処理
- ・見直し
- ・鑑賞

■ 学びのチェック

- ※「よし」と思ったらチェック丸を入れよう
- つくりたい形のイメージ
 - 自分としての表現したいテーマ
 - 素材(テラコッタ)の理解
 - 素材・テクスチャーの工夫
 - 色彩についての探求
 - 形についての探求
 - 素材・材料の準備
 - 用具の準備

見直しをもって、学びを深めるためのキーワード。これを基に生徒自身が制作の計画を立てる。流れは上から下に順番ではなく、いたりきたりしながら創造活動が進められるようにした。

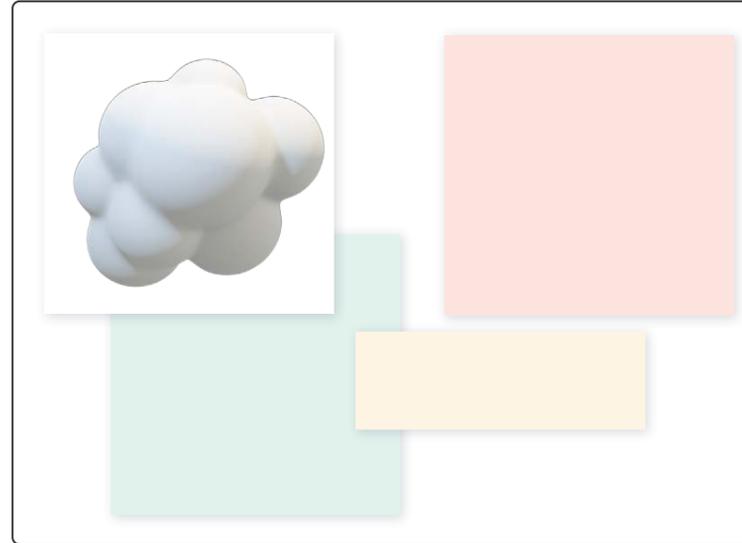
チェック表は、生徒自身が、納得した時にチェックを入れ、「学び」を確認しながら学習活動を進める。

【ワークシート作成時のポイント】

- Point 1：学びのねらいが分かりやすく示されているか。
- Point 2：生徒のワクワク・ドキドキを刺激し、自分自身や他者との対話を楽しめるワークシートか。
- Point 3：設問は生徒の実態を捉えたものか。生徒の自由な発想を保障しているか。
- Point 4：生徒の学びを第一に考えたワークシートか。(教師の評価資料としてよりも)

■ アイデアスケッチ

あなたが考えた造形や気付いたことについて、自由にメモしてください



■ 振り返り

作品について

題名：
解説(PR)：

自己評価	知識	形や色彩、素材の面白さを理解し、自分の思いや考えを形にできましたか。	A・B・C	
	技能	技法について理解し、意図に応じて創意工夫できましたか。	A・B・C	
	思考判断	表現	テーマを生み出し自分の形を見つけられましたか。	A・B・C
		表現	自他の作品のよさ美しさについて見つけられましたか。	A・B・C
主体的に		意欲的に楽しく学びを追求できましたか。	A・B・C	

◆学習のねらい

手を動かして考えることを進め、アイデアスケッチは思い付いたものをメモに描き貼り重ねるようにする。

◆評価の観点

【知技】形や立体としての美しさや面白さ、量感や動勢などの効果を考えてスケッチ。
【思判表】自分の心に素直に向き合い、たくさんの形をイメージ図やメモにする。集めた資料を貼ることもよい。

◆学習のねらい

自身の学びについて、学習目標に照らして振り返る。

◆評価の観点

学習を振り返って自己評価を行う。その際、ABCとした根拠や内容について考えたことなどをしっかり記述する。

制作を進めながら、試行錯誤し考えたりついたりし続けることを大切にしましょう。生徒の状況や時数の設定に応じて、項目を増減させたり、ページ数や形式を調整したりすることが大切です。

「活動の計画と記録」は別紙とした。
[学習の流れ]を参考に生徒自身で計画を立て、毎回の授業で振り返りながら、次の活動に向けての準備とする。

活動の計画と記録		今日の活動	自己評価
	予定		
1 /	題材について知る		
2 /			
3 /			



もっと、知りたい!! 美術の評価～理論編～

日文教用資料 [中学校美術]
令和4年(2022年)12月28日発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261
FAX: 06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33637

日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州本社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F-B
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690